

未婚の成人女性とその母親との関係

—サポートの授受による類型化と想定される心理的リスク—

GH091002：上加世田 寛 子

指導教員：若本純子准教授

問題

母娘関係は、ケア役割を通して一生にわたり両者の人生に影響を与える。そして、同じケア役割を担うことで、同一化を向け合う対象として、他の家族の成員とは異なる特殊な関係である（鯨岡，2002）。

母娘関係の先行研究では、未婚の成人女性とその母親との関係に焦点をあてたものはほとんどなく、この時期の母娘関係のあり方は明らかになっていない。未婚期は、次世代を担っていくものとしての準備期、移行期（野末，2008）であり、成人期に引き起こる自立や子育て、介護をめぐる困難や問題の芽が、この時期の母親との関係の中に存在していることが推測できる。

目的

本研究では、未婚の成人女性とその母親との関係をサポートの授受を軸に捉え、母娘関係のあり方、さらには、関係をめぐるリスクを過去、将来を含めた生涯的観点から明らかにすることを目的とする。研究Ⅰでは、この時期の母娘関係の関係を抽出し、多様な母娘関係を明らかにする。研究Ⅱでは、リスク的な母娘関係を操作的に抽出し、心理的特徴を検討し、将来生じうるリスクを予測する。

方法

調査方法・期間 2010年9月～10月に質問紙調査を行なった。

調査対象者 未婚の成人女性を532名を対象に質問紙を配布し、331名の回答を得た。そのうち、年齢未記入、不完全回答のものを除いた21～35歳の298名のデータを分析対象とした。

調査内容

サポートの授受に関する項目①母親から受け取るサポート 「現在(過去/将来)、母親からどの程度サポートを受け取っている(いた/いくつもり)か」、についてそれぞれ「よくある(あった/あると思う)」～「ほとんどない」の4件法でたずねた。②母親へ提供するサポート 「現在(学生の頃/将来)、どの程度サポートを提供する(した/するつもり)か」について4件法でたずねた。①、②のサポート授受の内容については、永田・新美・松尾

(2007)を参考に、サポートの受け取りや提供が行われる場面(日常的な場面、緊急時の場面など)とサポートの種類(情緒的サポート、道具的サポート)を想定し、項目を作成した。③サポートの満足感 現在と学生の頃のサポートの授受に対する満足感をたずねた。4件法。

母娘関係の心理的側面を捉える変数①現在の母親との結びつき 小高(2008)、永田・新美・松尾(2007)等の尺度を参考に構成した。4件法。②過去の母親からの育てられ方の認知 山口(2008)の尺度を参考に構成した。4件法。③母親の老いの認知によって生じる気持ち 池田・佐藤(2008)の尺度を使用。項目数が多かったため、先行研究において、因子負荷量の高い3項目のみを採用し、構成した。4件法。

結婚観 小田切(2003)の尺度や(株)ライフメディアが行なった結婚に関するインターネット調査結果(2006)等を参考に10項目で構成した。4件法。

フェイス項目 年齢、雇用状態、経済状況、母親との住居形態、母親の健康状態などの10項目。

結果と考察

因子分析(主因子法・プロマックス回転)

現在の母親との結びつき 「親密」「尊敬」「対立」「対等」「服従」の5因子が抽出された。

過去の母親からの育てられ方の認知 「回避的な養育態度」「安定的な養育態度」「不安定な養育態度」の3因子が抽出された。

母親の老いの認知によって生じる気持ち 「老いへの悲哀」「老いた母親へのいたわり」「老いに対する負担感」など先行研究同様の7因子が抽出された。

結婚観 因子分析を行った結果、因子ごとのまとまりが弱くなったことから項目ベースで分析を行った。「幸せになれるから」「早く家を出たい」「結婚することは当たり前だから」「さびしいから」「結婚しないことは母親が悲しむから」など10項目であった。

研究Ⅰ 未婚の成人女性とその母親との関係の類型化

現在のサポート授受の項目と満足感の計14項目でクラスタ分析を行った結果、4つのクラスタ

が抽出された。クラスタの投入項目、心理社会的変数の差の検討から示された特徴から、クラスタを命名した。以下に各クラスタの特徴を示す。

まず、過去、現在、将来にわたって母親とのサポートの授受が盛んで、過去、現在と安定的な関係である<親密群>、親密群と対照的に過去、現在、将来にわたって母親とのサポートの授受が最も少なく、過去、現在と母親との親密でない<疎遠群>が示された。また、母親への提供が、過去から現在になるにつれ多くなっているとの特徴を示し、母親へサポートの返報が行なわれはじめているこの時期特有の<返報群>、緊急時や生活上の援助などサポートが必要な場合には、母親に求めるという現代の時代を反映した<リソース群>が示され、この未婚の時期の多様な母娘関係を明らかにすることができた。

研究Ⅱ 未婚の成人女性とその母親との関係におけるリスク

研究Ⅱでは、先行研究で理論的に示されているリスク的な4つの母娘関係を操作的に抽出し、検討を行なった。変数の操作については、以下の表に示す。

想定されるリスク名	変数の操作	
密着型 (N=67)	同居	親密が平均値より高い、対立が平均値より低い
(密着服従型 N=40)	同居	親密が平均値より高い、対立が平均値より低い 服従が平均値より高い
母親を求め続ける娘 (N=38) (娘側の依存型)	同居	親密が平均値より高い、対立が平均値より高い 現在の関係の満足感が平均値より低い
葛藤を抱えていながら母親離れて きていない娘 (N=19) (母親側の依存型)	同居	親密が平均値より低い、対立が平均値より高い 現在の関係の満足感が平均値より低い
情緒的遮断型 (N=25)	別居	安定的養育態度が平均値より低い 現在のサポートの授受が平均値より低い

密着型・密着服従型 密着型の母親との関係は、一卵性母娘といわれる密着した関係を想定した。この型とそれ以外の同居サンプルとの比較を行なった結果、この型は、母親と過去、現在、将来と良好な関係であり、結婚や母親の老いに対してもネガティブな結果が見出せず、リスク的な様相は見出せなかった。そこで、密着型の中でも母親との服従な関係を示す密着服従型と密着型との比較を行なった。その結果、明確な結婚理由が見出されず、母親の老いに対して心配する気持ちが生じにくく、将来も母親からの金銭サポートを期待していることが示された。これらの結果から、双方の身体的・心理的健康や経済面などの社会的状況が保たれているうちは顕在化されることは少ないかもしれないが、母親の老いにより服従のバランスが崩れた際に、問題が生じる可能性が高いことが推測できる。

母親を求め続ける娘 葛藤と親密さの両方の思いを抱えながらも母親を求め続け、自立ができない関係を想定した。この型とそれ以外のサンプル

との比較を行なった結果、この型の成人女性は、過去の育てられ方は不安定であるにも関わらず、現在、将来と生活のサポートを求めるつもりであり、さびしいから結婚したいとの思いが強く、母親の老いに対して悲しみを抱えていることが示された。これらの結果から予測されるリスクとしては、過去から続く母親への満たされなさが、将来は寂しさを埋める結婚により、配偶者や子どもへと寂しさを埋める対象をかえていくことが推測される。また、満たされない母親の老いを認めることが難しくなることが考えられる。

葛藤を持ちながら母親離れできない娘 母親との葛藤を感じながらも、母親から自立することができない母娘関係を想定した。この型とそれ以外の同居サンプルとの比較を行なった。その結果、この型の成人女性は、過去から現在にわたり母親との関係は不安定で葛藤を抱えている。さらに、同居しているにも関わらず、サポートの授受は少ない。結婚は、早く家を出たいからとの思いが強いことが示された。家を離れない理由の追加の検討より、母親の健康状態が悪い母親が多く存在している型である。これらを踏まえると、娘の結婚等家からの自立時にリスクが顕在化すると推測される。母親から自立を阻まれたり、娘が離れることへ罪悪感を抱くなどの形でリスクが生じると考えられる。

情緒的遮断型 進学や就職を契機に原家族から離れ、母親との関わりを絶とうとする関係を想定した。この型とそれ以外の別居のサンプルとの比較を行なったところ、現在、母親には、尊敬や親密さを抱いておらず、将来、母親とのサポートの授受は少なくなることを推測し、老いに対してネガティブな思いを抱いていることが示された。これらの結果から、母親が年老いて、娘が介護を引き受けざる得ない状況になった際に、今まで遮断することで保っていた心の安定が崩れ、母親との間での今までの思いに加え、世話をしなければならぬ負担感や義務感が葛藤を引き起こすことが推測できる。

総合的考察

本研究では、未婚の成人女性とその母親との関係をサポートの授受を軸に、多様な母娘関係を示した。また、リスクの想定を通して、未婚の時期に成人期のリスクの芽が存在していることが明らかとなり、未婚の成人女性への予防的な支援の必要性を示した。縦断研究による知見の確定が今後の課題である。